

## 興禪護國と妙心寺

長谷部宗鑑

我が正法山妙心寺の開創は、今更申す迄もなく、六百年前花園法皇の叡旨勅願によつて離宮を草めて禪刹となし關山惠玄に賜はりし所、従つて他の五山並に南禪寺が常に幕府の歸依を受けたるに反し、大徳寺と共に傳奏支配により勅願寺待遇の特典を有し、始から皇室の祈願所としての宮寺であつた。故に歴代皇室との間に密接なる關係を持続し來り、然かもよく花園法皇御開基の叡旨並に開山の遺誡を遵奉し、他の五山等の僧徒が徒らに權勢に媚び、稍々ともすると國家を忘れ禪の面目を忘却するが如き時代に當つて、毫も權勢に媚びる事なく、國體の本旨に立脚して世塵を外に刻苦勵精、只管、興禪護國の爲に喪身失命を避けず、爲に開創當時から室町時代にかけて教界不振の時にあたり、巍然として法燈高く掲げられ、化門愈々繁く、法山發展の基礎は儼として確立せられたのである。

花園法皇と無相大師の御因縁に就いては今更説く要なき事ながら、法皇の御叡旨「往年の御宸翰」を拜しては、如何に法皇が開山を御信賴あらせられ、その「佛法興隆、一流再興、妙心寺造營」の

事に御軫念遊されたかが拜察せられ、誠に畏き極と申さねばならぬ。開山亦法皇をお慕ひし、皇室を思ふの念一入深く、その居室には唯御宸翰の他、何物をも置かず、世道頽廢の中にあつて常に皇室あるを知つて幕府あるを知らず、實に報恩謝徳と興禪護國の生涯であつた。

二世授翁は南北朝誠忠第一楠正成と並び稱せらるゝ忠臣藤原藤房の事で、その遁世以前の忠誠は申す迄もなく、その遁世當初から出世問法の道場に坐して、憂世の誠を致し、皇基の萬安を祈願して倦まざるその精根こそ、その興禪と相俟つて護國精神の旺盛なる事、推して知るべきである。

この頃から法山は幕府の惡しみを買ひ、爲に一時は花園の禪苑悉く他山の手収めらるゝの憂き目に遭ふたが、間もなく、法山中興の祖、雪江出づるに及び、當時儒に溺れ文に拘る五山の禪風を排して、茲に佛祖的傳の宗風を擧揚し、臨濟正宗の眼目を把持し、以て一流の旗幟を明らかにするや、畏くも後七御門院より妙心寺再興の綸旨あり、こゝに關山の正脈は雪江の一派から、景川、悟溪、特芳、東陽の四傑を出し、何れも化度一世に鳴り四派分流して宗風愈々瀾漫するに到つた。

雪江下の四傑は何れも京洛を中心によく勤王報國、愛山護法に盡したのであるが、就中東陽の如きは當時武家政治の積弊を厭ひ、皇室の御衰微、王化の不振を嘆き、依つて即今將軍諸將の薰陶こそ緊要であると考へたが、然し當時の幕府は全く度し難き無縁の衆生として、自ら法縁を求めて専ら尊王奉佛の思想鼓吹に力めたのであるが、殊に後土御門院より特芳にあてゝ賜はりたる「宗門無

双の綸旨」こそ、誠に意義深きものと共に皇恩の宏大に奉謝する所がなければならぬのである。

かくて代は室町の中期、この頃から幕威漸く地に墜ち、下剋上の風潮盛に道義頹れ、畏き極みながら皇室の御式微其極に達し、朝儀國典も御意の儘ならず茲に世態俗塵を避け給ひし御土御門、後柏原、後奈良、正親町の歴代諸帝は心を禪要に傾けさせ給ひ我が法山を以て佛法紹隆、寶祚萬安の祈願道場として御歸依遊ばれたのである。

この時代雪江下四傑に次ひで、大休、仁岫、快川、南化等は何れも道譽高く、殊に大休は後奈良帝問法の師として畏くも御宸翰を賜り、又龜年、月航、太原等の諸哲を産み、南化又後陽成帝問法の師として叡感契ふ所あり、従つて公卿侯伯も競ふて師の化に嚮ひ、就中信長、秀吉等の寵信を得諸大名の信仰愈々繁く、大休並に信玄の歸向を受けたる快川と共に、諸大名を導いて勤王の大義に覺醒せしめ、世道人心を益する事甚だ多く、従つて、織田、豊臣、武田、細川等を始め是等部將にして法山外護に任ずる者頗る多く、寺門の經營實に空前絶後の盛觀を呈するに到つた。

桐一葉落ちて政權全く徳川の掌握する所となるや、その對宗教策は佛教外護にあつたと云へ、それは唯外形のみで諸山各派に夫々法度を制定して制約牽制を加へた、爲に僧徒の意氣沈滞して世と共に太平無事、殊にその對朝廷策たるや陽尊隱抑にして不遜の振舞多く、諸大名以下幕府の御機

嫌をとり、僧徒も亦愚俗に迎合して恬淡として恥ぢず、この間にあつて終始勤王的態度を持した我が一派諸師に對して、幕府は常に酷烈なる威壓を加へしにも係らず、諸師は能く縦に禪機の活動を説き、横に勤王思想を鼓吹し、専ら花園法皇宸翰の教旨と開山大師の正法を宣揚すべく、只管禪脈の發展に努め、以て能く興禪護國の實を擧げて來た事は誠に一派最大の誇とすべき所である。

先づ江戸時代の劈頭に當つて道學兼備の大宗匠鐵山を擧げねばならぬ、師は靈雲に住して衆を接するの他、畏くも後陽成帝に咫尺して禪要に奉答し、常に家康潛上の甚しきを惡み、皇室を懷ふの情、誠に慨然たるものがあつた。嘗て家康が鐵山に向つて自ら大檀越たらむ事を申出た時師は家康の潛上を惡むの餘り、賊と迄大喝して之を一蹴せし事あり、この法山勤王一流の禪苑に坐して如何に殊遇を以て迎へんとしても幕請に動かなかつたその義骨實に痛快ではないか。同時に相前後して一派の棟梁として禪門擧揚に盡した一宙と庸山がある。共に權勢に屈せず、或は亦有名な鐘銘事件に五山の碩徳等が權勢威嚇の前に屈して曲學阿世、以て銘文の撰者清韓に不利な批評を加へし中に敢然として時勢に抗し、權勢に阿諛せざりし硬骨漢我が海山あつて諸侯を接化、大義を宣揚せしあゝるを喜ぶのである。

次ひで紫衣事件四僧謫流問題こそ、事皇室の威信に關するものにして、幕府專横の極、爲に後水尾帝は「あし原やしげらばしげれおのがまゝととも道ある世にあらばこそ」とて、遂に御讓位を仰

せ出さるゝに到り、此間に處し我一派の碩學に雲居、愚堂、一糸、大愚等の諸師ありて、何れも毅然として法燈を掲げ、畏くも簾前に伺候しては問法に對へ奉り、或は後水尾上皇の御内意を體して尊皇斥霸の密議を凝らす等、よく勤王の大義を唱えて興禪護國の大活動を試み、世道を化し人心を導いて、茲に江戸時代尊皇論喚起に貢獻する所甚だ大なるものがあつた事を銘記せなければならぬ。

次に元祿時代を概觀すると、當時の我一派は内外共に紀綱整備し寺統益々發展確立して、六祖四派の法孫天下に瀾漫して開創以來の全盛期を現出し、此時代を中心に無著、白隱、古月の三哲出で無著は法山經營の一面に努めて大いに規矩を整備し、白隱は内に向つては森嚴栗蓬の祖道を恢迨し外に對しては濟世利民よく禪家の新生面を開拓し、古月亦獨特の禪風を以て一代に鳴り、相共に興禪以て禪界革新の大先驅者と云はねばならぬ。稍々下つて東嶺並に斯經は一糸、愚堂の尊皇禪を以て一家風をなして東西に雄飛し、幕府擅政を遺憾として神道を研究し、以てこれを禪味化し、常に近衛、久我、千種、岩倉等の勤王諸卿と親交を結びて國事を談じ、爲に幕府は二師を目して異端者となし、その尊皇思想を恐れて絶えず警戒の眼を放さなかつたのである。

これ等二師の後を受けて寛政から以後文政にかけての一派は多士濟々の有様で、その最も顯はれたるは隱山、卓洲の二師、つゞひて祖芳、方巖、仙崖の三傑出で、相共に衆を率ひて宗旨擧揚に力

め、法幢の隆盛古今に絶するの有様であつた。然かもこの時代以後、代は所謂幕末であつて、尊王佐幕或は攘夷、開國と諸論紛々として物擾騒然たる時代に逢着し、この時代思潮に乗じて一派義衲の輩出少からず隱に陽に國事に活躍盡瘁して憂世慨國の誠を致す事少くなかつた。

かの回天の大事業王政復古の一過程たる公武一致論の如きは、實に我一派に陽山並に南海のあるありて、夙に世界の大勢に通じ、大義名分を明らめ、至誠以て君國に報するの概あり、従つて當時の騷然たる國狀打開の一策として當代の諸侯志士をして公武一致に赴かすべく指導したその功を忘れてはならない。殊に南海は彼の大鹽の亂の如き財界不振に際して、禁裡堂上方に對し金融上頗る懇篤なる斡旋の勞を取り、又國事に關して深き消息を公武間に通じ、或は亦、日々法華經を讀誦して窃かに王政復古の實現を祈願したる等、何れも師の誠忠より逆り出でた所である。續いて幕末勤王の三洲と稱せらるゝ海洲、栢洲、鼎洲あり、更に晦岩、機外の二師出で、隱然護國勤王の事に不惜身命の努力を拂ひ、よく開創以來の傳統を守り、以て幕末を花と飾つたのである。今これ等諸師の活躍の大要を眺めて見やう。

安政五年以後條約勅許問題、將軍繼嗣の問題を廻つて、憂國の志士四方に起り、幕府誹謗、尊王攘夷の論愈々盛となり、幕府は遂に強硬處斷の處置に出で所謂安政の大獄を起したが、天下の輿論益々驅つて險惡に赴かんとするの時、我栢洲は、かくては國家の前途大いに憂ふべきものありとし

て、陽山、南海の説を承けて、藩主島津公に説くに公武結合の事を以てしたのである。師が如何に島津公をして公武合體を成就せしむべく努力したかは、文久二年「和尚は藩意を上聞に達せんとして心配一方ならずと聞く、神妙なるぞ、和尚の心事は遂一上聞に達せしが至極御満足に思召されしぞ」との有難き綸命を拜せしによりて伺ふ事が出来る。海洲亦頗る豪邁の風あり、恒に尾張藩主徳川慶勝と時局を論じ、爲に慶勝は師の勤王思想に化せられ開國主義實現には廢幕還政せざるべからざるを悟らしめ、その法嗣鼎洲亦その氣節を受けて神秀穎邁、夙に時勢を達觀し、現下救國の要諦は薩長聯合を以て第一の急務と考へてゐたから、かの文久三年朝議一變から長藩の禁裡御守衛を免ぜられ、三條公以下七卿の長洲落ちに端を發した蛤御門の變には長くも長藩の禁闕を犯した罪輕からず、これに乗じて薩藩が征長の勅命を乞ふに到るや、鼎洲窃かに長藩の冤罪を雪がんと、師の海洲に計り、遂に征長總督慶勝を動かし、毛利家檀寺の機外を伴ひ、進んで長藩問罪使として下向、毛利父子の謹慎と三國老の切腹を以て赦罪の意を表せしめ、自ら哀願書を携へて總督の下に到り、遂に征長の矛を收めしむる事に成功し、徐々に機を見て薩長提携を畫したのである。實に鼎洲機外の二師は我が法山の尊王主義を體して、藩長各々その主張する所に差あるも、窮極する所は大義名分を明らめ、國運進展を計るにあるを喝破し、その小異を捨て、大同に一致せしむべく、所謂妥協親和の尊王主義に歸せしむべく努力大いに力め、遂にこれが縁となつて間もなく薩長聯合は成立し

たのである。同時に伊豫に晦巖あり博學高德、京師に出で、は三條、岩倉諸卿と尊王を語り、入りては土佐藩の蒙を啓き尊王主義を鼓吹し、更に長土の聯合を企圖するなど國事に奔走大いに努めた。

かゝる間に高杉晋作等過激派の憤起により、幕府は第二回征長の軍を起したが、時恰かも薩長聯合成り、幕府は連戦連敗進退谷まるの時、孝明天皇國事御軫念の中に御崩御、明治天皇御登極遊さるゝや、大勢茲に全く一變して、遂に土佐藩の勸告に従つて慶應三年十月、幕府は大政を奉還し、つゞいて王政復古の大號令が煥發せられ維新の新政を見るに到つたのである。この回天の大事業が完遂せられたのは全く薩長聯合と、土佐藩の啓蒙が重大なる要素を爲してゐる事を思ふ時、我が海洲、栢洲、鼎洲、機外、晦巖等諸師の功亦偉大であると言わねばならぬ。

かくて王政維新と共に社會萬般悉く面目を一新したが、就中當時復古の義に重きを置きし結果各地に廢佛毀釋のこと起り、法燈は正に暴風下に明滅するの危機に瀕するに到る。然しながらこの間にありて挺身起ちて官に抗し、誤れる復古の義を匡し、この大法難を救ひし者は相國寺獨園である。而して我一派にも人無きに非ず、鰲巖、無學、匡道等の諸師よく獨園の後をつぎて明治佛教興隆に力を致し、更に小林虎關、坂上宗詮、豊田毒澁、中原鄧州、東海猷禪等諸師相次ひで出で、佛教復興と共に濁浪逆卷く社會を淨化し、混沌低迷の思想界を指導し、かくてこれ我が關山一流の正脈は幾多禪宗諸派を壓して明治、大正、を経て昭和の今日愈々燦として、教界に重きを爲してゐるので

ある。

以上述べ來つた如く、我が妙心寺は、その開創以來、常に尊王の大義に立脚して今日に到り、その間幾多の英俊輩出して正法を護持し、興禪以て護國の實を擧げて來た。これは蓋し當然の事ながら、他の諸山諸派に比して誇とするに足る事を信じてやまない次第であるが、開山大師の流を汲む我々法孫は現下重大時局に直面して、稍々ともすると一部誤れる國粹論者によつて、佛教は外來なりと排撃されんとするの傾向なきに非ざるこの時この際、確固たる信念を以て愈々切磋琢磨益々興禪護國の思ひに住して、苟も誇るべき法山祖師方の芳躅を汚す事無き様、不惜身命の努力を念願すべきである。

最後に私は前記諸師の中、江戸時代の勤王僧一糸こそ特に一異彩を放ち、且その後世に及ぼせる影響の甚だ大なるを見て、特にその事蹟の概要を述べて頁を滿たし、拙き稿を終らうと思ふ。

× × ×

勤王僧一糸の事蹟につきて、

一糸、緯は文守、現公爵岩倉家の祖先である具堯の第三子にして久我大納言晴通公の孫、關白近衛尚通公の曾孫に當り、代々公卿中でも特に勤王の聞え高き名門の出である。

師幼にして穎邁、夙に佛法の遙かに孔孟の道に越えたるを喝破して、十九歳にして横尾山賢俊に

就き剃髮し、爾來三密の窓に心地の戒珠を研く事一日も怠らず、かくて約一年、茲に律學の畢竟生死に抵觸する所無きを悟り、辭して泉州に行き、南宗寺澤菴の室に投じて鉗鎚を受くる事兩三年、孜孜として研鑽實究晝夜を捨てず、概ねその要訣を盡すに到つた。この會裡に於て豫て澤菴に歸依して居た勤王公卿近衛信尋と識り、信尋は一条の非凡を後水尾帝に奏上せしより帝輒ち召して禪要を問ひ給ふに到つた。この時、師は聖恩に感泣して御諮問に奉答し、且、肅然として勤王の宿志を述べ「身はたとへ佛門にあるとも、よく天下の義衲を奮起せしめ、諸藩列公をして大義名分を辨へしむ」べき大抱負を奏上したのである。爾後大いに天寵を忝うし屢々宮中に入出し烏丸光廣等にも深交を結び勤王の志一日も忘るゝ事が無く、故に幕府監視の眼は常に師の上にも注がるゝ事となつた。かの寛永四年惹起した紫衣問題は遂に四僧（澤菴、玉室、單傳、東源）諳流となり、この事件こそ幕府專横の極であつて、天皇大いに逆鱗遊され、俄かに讓位御受禪を仰出され落飾佛門に歸し給ふに到り、こゝに師は愚堂、雲居と共に心要を吐露して叡慮を慰め奉り、且到る所勤王思想鼓吹に努めたのである。

先に澤菴が奥州に謫さるゝや、師も亦往いて朝夕薪水の勞を取る事一年餘にして歸洛したが、師は當時の世態並に教界に對して甚だ嫌焉たらざるものがあつたから、寧ろ身を山野に委せんとして洛西西ノ岡に閑夢菴を結びて高養自適の處と定めたが、その位置京洛に近き爲、師を慕ふて集る溍

紳漸く多く、後水尾上皇御諮法の事は申すも畏き事ながら、近衛信尋、烏丸光廣等の勤王公卿の出入は、亦忽ち幕府の注目する所となり、その監視の日、日毎に煩しく、遂に寛永九年丹羽山國に菴を結んで雲煙の生涯を終へんとして此處に移り、後更に施主あつて別に桐江菴を營んで隱棲した。而もこの隱棲たるや世の所謂隱遁者流とは大いに異り、徒らに獨處安居を貪らむが爲ではなく、師の胸中一點滂薄たる氣魄の潜んでゐた事は疑の無き處にして、師此處にあつて當時の佛道祖行の全く廢れたのを慨し、この小菴に枯淡な生活に只管聖胎長養を念とし、寸陰を惜しんで切瑳琢磨怠りなかりしに見ても明らかである。

かくて師は深く韜晦を期したのであるが、道香流石に掩ひ難く、道を求むる者踵を接し、就中烏丸光廣の如きは幕府監視の目を避けて虚無僧に姿を變へて庵居を訪ふて道を求むる事連りであつた。

師嘗て此處にあつて佛祖の玄關を打透、無師自證して以來、その手段辛辣にして一揆一摎舊時に、同からず、機敏にして無碍自在であつたが夙に入明して明師の證を得んと志、切なるものがあつたが、當時國禁なるを以て果さず後に到つて妙心寺愚堂の法を嗣ぐに到つたのである。

長くも上皇も亦師を御慕ひ遊される事切なるの餘り、十五年秋には洛北西賀茂に禪刹を創め、靈源菴と名づけて師を丹波より迎へて朝夕問法の師たらしめむと思召され、師即ち叡感辭し難くして十一月入院したのであるが、上皇は屢々此處に御微行あつて義衲を召し志士を招きて深き御内旨を

給ひ、師亦雲居、愚堂等と會して尊皇斥幕の事を談する等の事ありて、幕府亦もや此處に往復する僧俗一團の監視を嚴重にするに到り、師亦洛中倥傯を厭ひ、在山僅か一ヶ月餘にして舊棲丹波に歸つた。然しその後も仙洞に伺候して問法に對へ法を談する事一再ならず、寛永十八年には桐江菴の北に上皇の舊殿を賜はり禪刹を營み大梅山法常寺とし一糸を開山とすとの宣旨を賜ふ。先に靈源菴を賜ひ、今亦法常寺を賜ひ、共に勅願の大道場として「永く師の遺範を垂れ他門をして混ぜしめざるざる様に」との叡慮を拜しては、僅か三十餘歳の師にして、よく斯くの如く絶大なる優遇と叡信とを辱ふせし、その偉大なる徳望の程を景仰せずには居られないのである。

さてその後、寛永二十一年偶々江洲永源寺の拜請に應じて、こゝに錫を移したが、幾許もなく天下の名衲高士の風を望んで集る者多く、大いに舊觀を改め禪風亦振ふに到つた。かの雲居、愚堂二師が師の許を訪れ、殘燈影裡に世道の廢頹を嘆き、宗風の萎靡不振を語り相共に心を傷めたのはこの間の事である。

殊に法皇は正保元年に廿有餘年間御愛玩の後陽成帝御遺物の紫の寶硯を師に下賜遊され「海はあれど君の御影を見る日なき硯の水のあはれ悲しき」「我後は硯の宮のふたにまでとりつたへてし形見とも見よ」の御製二首を添へ給ひ、師天恩に感泣し一吟を献じて、永く山門の重寶とし、法子法孫をして聖恩に對へ奉るべき徵意を披瀝したのであつて、この寶硯は今尙永源の重寶として藏せら

れてゐる。

かくて翌年六月三十八歳美濃の大仙に愚堂を訪ふての歸途病に感じ、この報に接し給ふた法皇は宸襟を惱まし給ふ事一方ならず、山中、醫に乏しきを以て京師に召し寄せて醫藥を賜ひ、問疾頗る叮重、誠に畏れ多き極であつた。かくて病閑を得て皇恩に拜謝し、永源に歸るや、法皇特に官材を賜ひて永源の方丈を一新し、皇太后亦御内帑を下して助資し給ひ、茲に宏壯雄麗なる大伽藍が完成したのである。かくの如く永源に錫を移してより前後四年、常に興禪以て國家の安泰を念としてゐたが、法皇の外護と師の道譽は遂に内外共に全く舊觀を革め、法幢儼として輝くに到つた、誠に偉と言ふべきである。

然るに翌正保三年病復發し、法皇はこの度も頻りに詔して京師に召し賜ふたが、師は今度こそ自ら病の治せざる事を覺てゐたから、御叡慮を拜辭して永源にあり、法皇は止むなく、わざ／＼醫を遣はし、馬山の浴を賜ふなど御軫憂甚だ切なるものがあつた。然し師は病にありと雖應接の禮、常に異なる事なく、左右を顧みて「我行期近し、汝等宜しく祖道を以て念とすべし」とて諄々と教誨する所あり、後事を弟子に遺囑して三月十九日泊然として寂を示した。

師の遷化に際して法皇御哀惜の情は誠に畏れ多き極みながら、亦我か教界にとつても一大損失であつて、愚堂の如きは恰も自分の隻腕を失ひたる感がするとて惜しんでゐる。

噫！師に借すに天壽を以てせば、その造詣感化の如何に多大であつたかを思ふ時、誠にその短命は遺憾至極と言はねばならない。

惟ふに師三十九年の生涯は不斷の奮闘精進と枯淡堅苦の歴史であつて、宗門興隆と禪風舉揚の爲には持戒の清淨嚴肅なるべきを説き、或は放縱自恣なる當時の禪界の弊を矯正せんことに努め、或は皇道の挽回を期しては尊王の大義を宣揚して幕府の専權を憤り、或は名利に馳せ權勢に媚びる當時の世態を誡しむるなど、忠魂迸り出で、大いに勤王思想の鼓吹に努め、實に興禪以て護國の精神に終始した生涯と言ふべきである。故にこそ後に一糸語録上梓に際しては、畏くも靈元帝御親ら序文を書かせ給ひて、師の高徳と忠誠を偲ばせ、これを顯彰遊ばされたのであつて、臣下としての光榮これに過ぐるものがあらうか。

亦上皇の第一皇女梅ノ宮は當時の世榮を厭ひ、御父上皇の問法に奉答する御歸依遊され、遂に師につきて、受戒剃髮され、法名を文智、大通と號し奉り、大和圓照寺の御開山とられた。宮は師につきて實參真究、世の欽仰を聚め、師と法談するを何よりの楽しみと遊され一糸遷化の後も永くその遺風を遵守して興禪護國の途に精進し給ひし道業皎潔稀に見る女丈夫であらせられた事は一糸を述ぶるにあたり特筆すべき事であらふ。

尚、師が生前、後水尾帝の敍旨を奉じ、勤王思想を鼓吹し、王道挽回に力を致せし事は江戸時代

尊皇論勃興の先驅をなすものにして、蓋し後水尾帝が王政復古の御本願は代々皇室にて御口宣にて傳えませしが同時に一系の法系寺たる靈源法常二寺の住持の間に口傳せられ、一方一系の俗縁である岩倉家にも口傳せられ來つたものゝ如くである。

さればこそかの維新の大業を翼賛し奉りし岩倉家代々の回天の宿志が既に、この一系の勤王思想によつて礎定せられて居た事に思ひ到らば、開創以來皇室と密接なる關係を有する我が妙心寺史上に於ても亦特別に一大光輝を放つものと言はなければならぬ。(昭和一四・一〇・五日稿)

備考 一、限られた紙數であるから極めて簡単に概説するに止めた。

二、開創當時の状況並に花園法皇と開山大師との御因縁等は今更説くまでもないとして省略した。

三、白隠については他と重複するを以て省略した。

四、紫衣問題、古月等、一般によく知られてゐることは簡叙して、寧ろ隠れた事蹟の概要に觸れることに努めた。